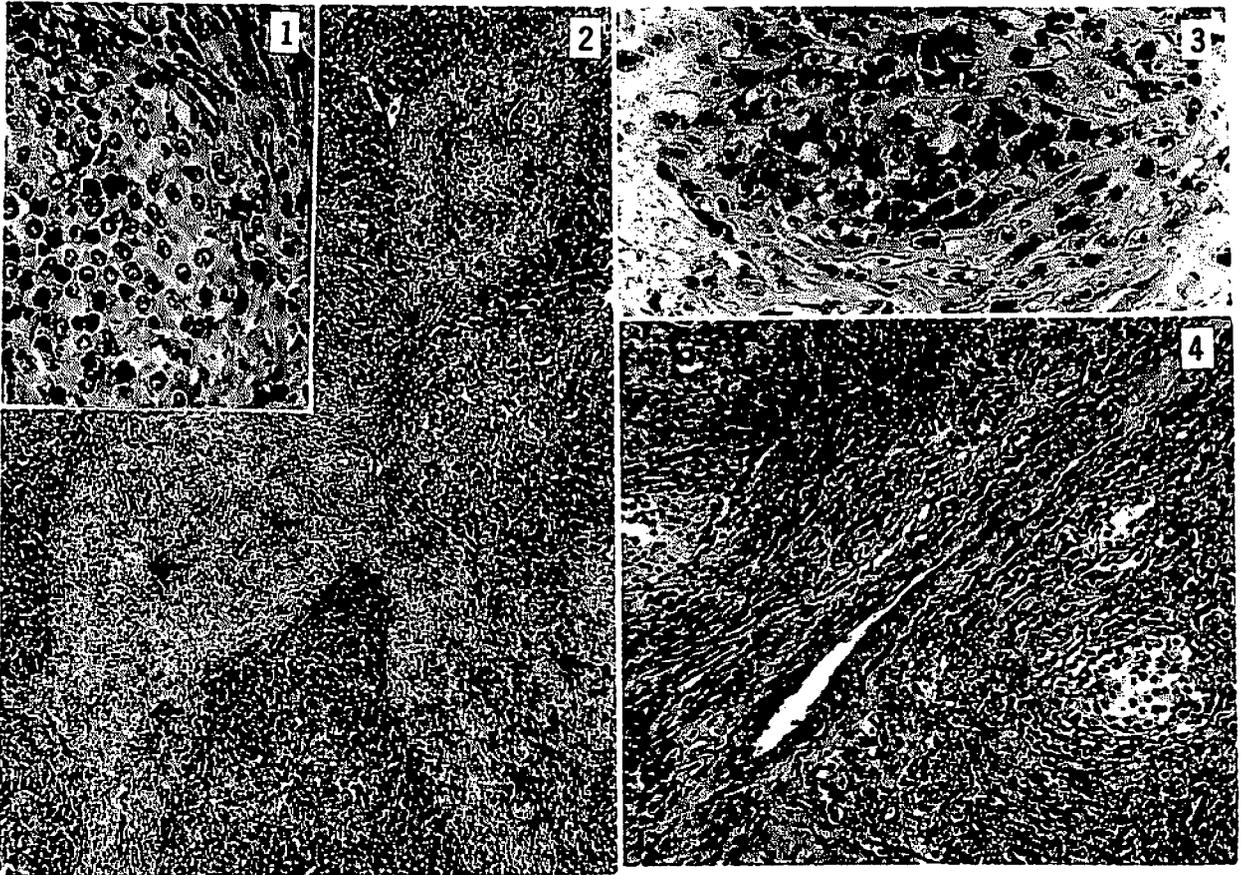


豚脾・肝の繊維症と肥満細胞増殖 (mastocytosis?)

北大比較病理・札幌市衛生課出題 第17回獣医病理学研修会標本No.260



肉眼像：石狩(?)で飼育，1975年6月，札幌屠場で肉用屠殺された6ヵ月齢牝豚の肝と脾。診断は脾巨大症と肝硬変。肝 3.0kg, 38.0×30.0×6.5cm；小葉間結合織の強い繊維性増殖。脾 3.7kg, 81.0×14.5×6.3cm；剖面結合織で満たされ，固有構築不明。肝・脾共に硬度極く鞏。これらを，各部門を含め，10%フォルマリン液で良好に固定。

組織像：(1) 肝 小葉間結合織の強い繊維性増殖 (Fig.2, 肝, H-E)。繊維芽細胞増殖及び好酸球浸潤強し。後者は小葉間結合織辺縁部でより強い傾向。静的な胆管新生。小葉組織の直ぐ周囲で偽胆管多し。髓外造血巣散在。増殖小葉間結合織が小葉組織内に侵入してそれを分割・侵蝕。大部分の島嶼状小葉組織はかくして出来たものと看做さる。小葉間結合織は門脈枝など静脈性血管に極めて乏し。細小血管は壁の水腫性・疎鬆化性膨化 (Microvascular alteration) を屢々表わす。

増殖小葉間結合織では，更に，大小の明調な類上皮細胞様細胞からなる巣 (Cell nests) の散在が目目を惹く (Fig.2, 矢印)。この巣 (Fig.1, 肝, H-E) には程度様々な好酸球浸潤あり，又増殖結合織繊維或は平滑筋繊維が走ることも屢々。巣構成明調細胞はメタクロマジーを呈する大きさ概ね均一の顆粒或は同様大きさの微細空胞を持つ。この細胞は肥満細胞と診断される (Fig.3, 脾, トルイジンブルー；肝の小葉間結合織細胞巣と同様の巣)。肥満細胞は，巣以外に，結合織繊維乃至繊維芽細胞

間にも散在或は疎に集簇。数乏しい静脈性血管 (前述) のあるものは，弱いが，好酸球浸潤を混えた内皮細胞増殖を明らかに示す。そして稀に，門脈枝分岐部における内膜を中心に発達した明調細胞巣 (前述と同質のもの) に遭遇した。

小葉組織は，辺縁部で時折肝細胞ミトーゼを示し，偽胆管を形成 (前述)。髓外造血強く，毛細血管腔内に骨髄性細胞多し。又毛細血管腔内に肥満細胞の流泳或は微小巣時折。内皮細胞活性化。肝細胞は細胞質の水腫性疎鬆化・膨化，などを示す。毛細胆管拡張。

肝門部は，リンパ節に肥満細胞巣 (肝における同様の巣) が稀に見出された。脈管・神経に意義ある変化なし。

(2) 脾 濾胞を含め，リンパ球系要素殆ど消失。一面に繊維性結合織の増殖でおゝわる (Fig.4, 脾, H-E)。それは肝におけるそれと質的に全く同じ。肥満細胞巣 (Fig.3; Fig.4, 矢印) も，肝程には目に付かないが，容易に指摘さる。好酸球浸潤も肝のそれよりも弱し。髓外造血強し。増殖結合織繊維間隙，即ちそれは多くの場合毛細血管腔であるが，そこに，多くは壁着性の，内皮細胞よろしく存在する多くの肥満細胞が認められる。

脾門部の所見は肝門部のそれに同じ。

考察：脾巨大症を伴う，脾，肝及びそれらの附属リンパ節の mastocytosis (脾が原発) と診断したいが，如何か。“malignant mastocytosis” とば見られないか。

診断：研修会場で，表題の如き診断が与えられた。